

懐旧談としての戦争体験

—ある旧日本海軍少年兵のライフストーリー研究—

渡辺 祐介ⁱ

アジア太平洋戦争末期、本研究で考察するライフストーリーの語り手は、ネービーブルーの水兵服にあこがれて海軍を志願した軍国少年だった。そして、海軍で彼は自殺を考えるほどの厳しい私的制裁を受け、多数の戦死者が出る激しい戦闘に直面した。しかし、彼は戦後も自衛隊に勤めて定年を迎えた。敗戦を挟んで、彼は二度も軍事組織を志願したことになる。彼は自身の戦争体験を批判的に反省して「戦争責任」を自問したり、声高に「反戦」の信念を語ったりするわけでもなかった。戦闘中には同僚に戦死者も出たが、彼は自分が生き残れた罪悪感にさいなまれているようでもなかった。むしろ、彼は戦争体験を懐かしんで語ることが多かった。本研究の目的は、こうした戦争体験を語った元少年兵のライフストーリーを再構成し、彼が軍隊生活を通して戦争とどのように向き合っていたのか、そして、彼が自らの戦争体験をどのように意味づけているのか明らかにすることである。「悲劇」や「反戦」を前面に訴える戦争体験に劣らず、軍隊生活を懐かしむような彼の懐旧談としての戦争体験も、戦争という社会現象をより深く理解してゆくための有効なテキストと成り得るのではないだろうか。

キーワード：戦争社会学 インタビュー 志願兵 軍隊生活

序言

アジア太平洋戦争末期、本研究で考察するライフストーリーの語り手はネービーブルーの水兵服にあこがれて海軍を志願した軍国少年だった。彼は自殺を考えるほどの厳しい私的制裁を受け、多数の戦死者が出る激しい戦闘に直面したが、戦後も警察予備隊、保安隊、自衛隊に勤めて定年を迎えた。彼は敗戦を挟み二度も軍事組織を志願したことになる¹⁾。こうした経歴を持つ人物は、自身の戦争体験について、どのような意味づけをしているのだろうか。

戦争体験の意味づけの仕方はいろいろであるが、

やはり旧日本海軍少年兵であった渡辺清の次のような戦争体験の意味づけは、戦中派世代にも共通する代表的なものとして知られている。

第1は、戦争を支える一員となった自身に対する強い反省の念に基づく意味づけである。成田龍一は「ひとが、自らの戦争経験を語る時、さまざまな射程と対象こそあれ、戦争責任が念頭に置かれていた」(成田 2010: 271)と指摘する。渡辺清も戦争の性質を「知らずに欺されていたとすれば、そのように欺された自分自身に対してまず責任があるのではないか」(渡辺 1981: 17)という考えに至り、侵略戦争に加担した自己の「戦争責任」を厳しく追及してゆく。

第2は、戦争で自分だけが生き残ったという罪悪感に基づく意味づけである。この感情はサバイバー

i 立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員

ズ・ギルト (survivor's guilt) と呼ばれる現象で、杉原保史によれば「生き残り者の罪悪感とは、一般的には、戦争・災害など、多数の死者が出る事態に巻き込まれながら、そこで生き残ったという事実について感じる罪悪感のこと」(杉原 1996: 17) と定義できる。そうした感情の持主の典型も渡辺清と言える。彼はレイテ沖海戦で乗艦の戦艦武蔵が沈没し、そのときの体験を基に『戦艦武蔵の最期』(渡辺 1982a) を執筆、仲のよかった4人の同年兵全員が戦死したと書いている。しかも、戦闘中の彼らの最期の描写は凄愴としか言いようがなく、読み進めるのが困難なほどである。そして彼は「みんなが死んで、自分だけおめおめと生き残ったことに納得がいかないのだ。おれも死ぬべきであった。……のがれることのできない生き残りの苛責と羞恥」(前掲: 277) を感じて戦後社会を生きてゆくことになった。

第3は、戦争を徹底的に拒絶する意味づけである。渡辺清は侵略戦争に加担したという深い反省をして戦争体験を総括し、「今後、もし僕を再び戦争にかりたてようとするならば、僕は僕をかりたてるその主体を、「正当防衛の手段」に訴えて殺すだろう。たとえそれが誰であってもだ」(渡辺 1960: 58) という激烈な「反戦」の決意を述べている。過酷で陰惨な戦争体験をした者は戦争に批判的となり、戦争を忌避する思いが生じて不思議ではない。

しかし、本研究が考察の対象とする元少年兵の語り手は、こうした意味づけのいずれとも異なる戦争体験を語っている。彼は自身の戦争体験を批判的に反省して「戦争責任」を自問したり、声高に「反戦」の信念を語ったりするわけでもなかった。戦闘中には同僚に戦死者も出たが、彼は自分が生き残った罪悪感にさいなまれているようでもなかった。むしろ、彼は戦争体験を懐かしんで語る場面が多かった。

もっとも、彼は戦争体験を武勇伝のように得々として語ったわけではない。彼が語った戦争体験には「明るい側面」だけでなく「暗い側面」もあり、彼はこの両面について振り返っている。そして、彼の木訥とした語りからは、彼が戦時下において国家の方

針に従って一生懸命、真面目に生きていたという思いが伝わってくる。こうした思いがあるからこそ、彼は少年兵として戦争に向き合った日々を全否定するのではなく、「明るい側面」は「明るい側面」のままに懐かしんで語ることができたのだろう。

本研究の目的は、こうした戦争体験を語った元少年兵のライフストーリーを再構成し、彼が軍隊生活を通して戦争とどのように向き合っていたのか、そして、彼が自らの戦争体験をどのように意味づけているのか明らかにすることである。

1 先行研究・語り手のプロフィール・分析方法

1.1 少年兵研究の概観

そもそも旧日本軍が少年兵を重視したのは、吉田裕が述べているように「純真で心身ともに柔軟な少年期から徹底した専門教育を実施し、特殊技能を持つ下士官を養成することが目的だった」(吉田 2017: 179)。しかし、向井啓二が「少年兵の存在は知られていたが、アジア太平洋戦争史研究や軍事史研究の分野では全く見落とされてきたといっても良い」(向井 2003: 70) と指摘するように、旧日本軍の少年兵研究は比較的少ない。代表的な研究としては、少年兵制度の概要と、国民学校高等科や中学校などを介した少年兵募集の構造を明らかにした逸見勝亮 (1990)、静岡県旧磐田郡を事例に大正2年から昭和20年までの少年兵徴募体制・指示系統を鳥瞰し、昭和18年が少年の地域や学校での生活が徴募体制に組み込まれる大きな転換期となったことを見出した鈴木貴 (2002)、海軍特別年少兵の体験集を基に志願動機のパターンなどを抽出した向井 (2003)、少年が愛国の情やささやかな立身を目指して従軍を志願し、入営後は「勇怯」を相互監視することで「皇軍」兵士たらしめた姿を描いた一ノ瀬俊也 (2006)、海軍飛行予科練習生と陸軍少年兵の概要を明らかにした高野邦夫 (2010)、陸軍少年戦車兵学校の沿革や教育内容について明らかにした松本

武彦（2015）などが目につくくらいである。

これら先行研究でも、少年兵の戦争や軍隊生活に対する意味づけの解明を目的としたものは少ない。その一因として分析対象と成り得るテキストの少なさがあると思われる。佐藤忠男は、学徒兵と比較して「少年兵たちのほうは、まだあまり判断力もない幼い頭で軍人に憧れて志願したのである。いやいやながら行ったわけではない。だから戦争に疑問を持たなかった。そもそもインテリではないから文章もうまくないし、十四、五歳から軍隊教育を受けていたら日記や手紙も紋切り型の勇ましいものしか書けなくなってしまう。そんな文章には他人は誰も興味を持たない。そんなわけで、もっともよく戦った少年兵の記録は残らなかったし、ろくに追悼もされなかったわけだ」（佐藤 1981: 262）と指摘する。

本研究は、少年兵が軍隊生活のどのような側面に張合いを持って日々の軍務に励んでいたのか、「紋切り型の勇ましい」手記ではなく当事者の比較的冷静な回想に基づいて考察することで、内面的な少年兵研究を新たに展開する点に意義があると思われる。

なお、本研究が対象とするのは志願に基づき軍の教育機関で養成された少年兵であり、鉄血勤皇隊や護郷隊など沖繩戦で召集された、あるいは強制的に「志願」させられた事例を扱っている少年兵研究との比較は行わなかった。

1・2 語り手のプロフィールとインタビューの概要

本研究で考察するライフストーリーの語り手である岩田次郎氏（仮名）は、昭和3（1928）年、岩手県気仙地方の農村に生まれ育つ。4歳年上の兄がおり岩田氏は次男である。彼に弟妹がいたかどうかはわからない。昭和17（1942）年3月、国民学校高等科（高小）を卒業して家業（農業）に従事。昭和19（1944）年5月、海軍に志願して16歳で武山海兵団入団、11月より海防艦に乗り組む。敗戦時、彼は海軍上等水兵で17歳だった。

敗戦後は実家に戻って農業や林業などに従事していたが、昭和25（1950）年に警察予備隊が創設され

ると入隊し、保安隊、そして陸上自衛隊にも勤務して准陸尉（施設科）として定年を迎えた。定年直後の再就職先はわからないが、インタビュー当時、彼は75歳で、福島県にある自宅近くの公共施設の夜間管理人をしていた。

筆者は大学の卒業研究で、福島県のある地域のボランティア団体でフィールドワークを行った。彼もそのボランティア団体の会員で、会長の補佐役として熱心にボランティア活動に取り組んでいた。岩手訛の温かみのある話し方にひかれ、いろいろ世間話をする間柄になり、地域の夏祭ではビール片手に海軍時代の思い出話をしてくれた。筆者は先の大戦について関心があったので、卒業研究が一段落した後、彼に海軍時代についてのインタビューを申し込んだ。

インタビューは平成15（2003）年4月に4回、5月と7月と10月にそれぞれ1回の計7回を毎回1時間程度、彼の勤務先の管理人室で行った²⁾。彼から得られたライフストーリーは、82項目のエピソードから成る約13万字のトランスクリプトとしてテキスト化した。トランスクリプトの表記で、筆者が補った言葉は（ ）で括り、用語や方言の解説は〔 〕で括った。「……」は省略を示す。なお、録音はできなかったが筆者にとって印象的であった発言は“ ”で括って引用した。

1・3 語り手の兵役制度上の位置づけ

海軍水兵は志願兵と徴兵とで成り立ってきた伝統がある。昭和4（1929）年に志願による水兵の採用年齢が17歳以上から15歳以上に改められた。岩田氏が志願した水兵は海軍の基幹兵種である兵科に属する。「此の兵種は海軍兵の中で最も人数が多く、其の職務は主として、直接戦闘に従事するもので」（鈴木英夫 1943: 85 一部新字体に改めた）、実施部隊における「兵」としての下積み軍隊生活が長い。

水兵は海兵団での約半年間（戦中は短縮）の新兵教育を終えるとすぐ実施部隊へ一等水兵として配属になる。そこで古兵の私的制裁に耐え、雑役に追われながら上等水兵、水兵長と進級する。さらに下士

官として出世するには普通科練習生となって各種術科学校で専門教育を受ける必要がある。そのためには試験勉強の時間のやり繰りも必要であり、当然日頃の成績のいかんによっては進級ままならず、海軍用語で言えば「お茶をひいてじゃくる（進級が遅れてやけくそな態度になる）」水兵も出てくる。

同じく未成年者を対象とした海軍の志願兵制度でも、戦場に出る前に軍学校生徒としての教育期間が比較的長くあり、軍の中堅幹部として下士官への昇進も約束されていた乙種飛行予科練習生や海軍特別年少兵（海軍練習兵）などがエリート型の海軍少年兵だとすれば、岩田氏は兵役制度の下では叩き上げ型の海軍少年兵であったと言える。

1・4 ライフストーリー再構成の指針

岩田氏は管理人室のテレビを見ながら、ぼつりぼつりと戦争体験を語ることが多かった。本研究が用いるテキストには、そうした断片的なエピソードがインタビューで語られたままに記載してある。ただし、語り手の断片的なエピソードも、語りのコンテキストに注意しつつ筆者が感じ取った特定の主題の下に再構成すると、断片的なエピソードを超えたライフストーリーが現れる場合がある。岩田氏の戦争体験をめぐるテキストを通読すると、軍国少年であった彼が兵士に成長してゆく過程が主題として見出せる。したがって、本研究では彼の海兵団入団から実施部隊での軍隊生活までを、時系列に沿ったライフストーリーとして再構成して考察した。

また、彼の戦争体験の語りには、笑って話せるような語り、本人にも解釈が定まらず声を潜めるような語り、物寂しい語り、凄惨な記憶を抑圧するように簡略化し、パターン化した語りなどがある。こうした戦争体験の語りそれぞれの類型を明確にするために、本研究では岩田氏のライフストーリーを大きく①戦争体験の「明るい側面」、②戦争体験の「暗い側面」、③復員体験と3章に分けて再構成した。

加えて、彼の戦争体験との向き合い方を明らかにする上で、彼の入営前の生活史を把握しておくこと

は重要である。次章では当時の社会状況や先行研究に照らして岩田氏の農村での生活状況、社会的位置、そして海軍を志願した動機を概観しておく。

なお、インタビューでは彼の戦後の生活、自衛官としての生活史を詳しく知ることのできるエピソードはほとんど語られなかった。当然、戦後の彼の生き方、生活史も戦争体験の意味づけの仕方に影響を与えていると考えられるが、この点を十分に考察に反映できなかったことは本研究の限界である³⁾。

2 入営前の岩田氏の生活史

2・1 農業恐慌・凶作の時代の「どん底の生活」

岩田氏は農村生活について「我々の子ども時代にはもう、どん底の生活した経験あつからよ」と繰り返し語った。その際、「どん底の生活」は「私なんかほんとの田舎の貧乏屋で、極限の生活を送ったつもり、だろうと思うけども、海軍に入ってからですよ、カレーライス食べたり、ハヤシライス食べたり」と、海軍の兵食と比較して語られることが多かった。

彼が生まれて1年後の昭和4年10月、ニューヨーク株式市場で株価が大暴落して始まった世界恐慌は、昭和恐慌として日本経済に深刻な影響を及ぼした。昭和恐慌は農業恐慌を伴い、加えて東北地方は度々凶作に見舞われた。岩手県では昭和6（1931）年、同10（1935）年、同16（1941）年と凶作で、特に「昭和9年（1934）に東北地方は明治35・38年以来の大凶作に見舞われ、岩手県の稲の作況指数は45という大被害で農家の生活が危ぶまれるに至った。特に気仙郡の作況指数は、28という甚大な被害となった」（陸前高田市史編集委員会 1996: 344）。

農業恐慌と凶作とで全国的に欠食児童が社会問題となり、岩手「県内でも県北を中心に全県的に数千の欠食児童をみたが、三陸地震（1933年）の翌年10月には1万5522人にも上った」（岩手放送岩手百科事典発行本部 1988: 236）。岩田氏は3歳・6歳・7歳・13歳のときに凶作・大凶作を体験したことになる。彼が海軍の兵食を参照する形で故郷での「ど

ん底の生活」を語った背景には、飢餓と隣り合わせの耐乏生活が強烈だったからである。

ただし、彼の実家は自作農であり、田畑の耕作面積について質問してみると、「大したことねえ、一町歩ぐらいだったんだべなあ。……俺の方の田舎としては、中の上だったべな」と語っているように、最下層の農家というわけではなかったことがわかる。もっとも、耕作面積が「中の上」であったことは、彼の実家の家計状況がよかったことを意味しない。昭和9年発行の『東北六県農村経済事情』によれば、当時の岩手県の農家1戸当り平均耕作反別は、田が5段3畝歩、畑が7段9畝歩で、合計1町3段2畝歩となる（楠本雅弘編 1984: 101）。そして、農家1戸当り平均収入支出金額及び状況は、収入が373円80銭、支出が445円（現金支出227円）で、「年々金70円内外ノ赤字ヲ示シツ、アルガ如キ状態ニアルモ現金支出ハ稍小額ナルヲ以テ大部分ノ農家ハ隠忍シツ、アルモ病気災厄等ニ遭遇スル時ハ直チニ負債ヲ増大スルガ如キ悲境ニアリ」（前掲: 107-8 一部新字体に改めた）というものであった。耕作面積に基づけば、彼の実家の家計状況は、当時の岩手県農家の平均状態にあったと考えられるが、貧窮の「隠忍」を強いられ思わぬ出費で「悲境」に陥る厳しいものであった。

2・2 社会的上昇の志向を持つ優秀な高小卒業者

実家が困窮していた様子は粗食だけでなく、高小卒業後の進学を断念した語りにも現れる。

「俺の（実家の）近くに、盛農学校〔岩手県立盛農学園芸学校〕ってのあったんだが、農家の者は、ほと、ちょっといいところの息子はみんなそこに行くんだけど、我々がそういうこと考えられなかったのよう。結局、金が無いから、月謝も払えないような、世の中だから。だから、俺が、小学校、あのころ、盛農学校ってのは、高等（小学校）2年終わって入る学校だったから。担任の先生ってのが、家に、訪ねて来たんだっけが。で、その、学校に、就学さ

せてくれてってことで、来たんだべ。……親父はもう、駄目だって、言下に断ったんだっけがさ。いやー、情けなかったがなあと思ってよ」

担任が進学を勧めに来るほどだから、高小で岩田氏は優秀な生徒だったと思われる。しかし、家計状況⁴⁾が進学を許さず、彼は義務制の青年学校に通い家業を手伝う日々を過ごすことになる。

ここで注目しておきたいのは、彼が社会的上昇の志向を持つ優秀な高小卒業生だったことだ。吉田は「忠良」な兵士の供給源として高小卒業生層の重要性を指摘する（吉田 2002）。軍や政府には「近代的な軍事技術を修得できるだけの最低限の知識と学力とを持ち、なおかつ高学歴者のように国家や社会に対して批判的でない層として、高等小学校卒業程度の者が期待されて」いたわけで、「まさに彼らは、天皇制国家の「期待される人間像」だった」（前掲: 118-9）。大門正克は、第1次世界大戦後から日中戦争前ごろまでの「初等教育が子どもに与えたものは近代的な規律であり、さらには天皇制的な国家主義であった」（大門 2000: 134）と指摘する。「天皇制的な国家主義」で教育された価値観は無垢のまま、さらに社会的上昇の志向を持ちながらも家業に甘んずる岩田氏は、まさに農村において軍が切望する人材の条件を満たす社会的位置にいた。

2・3 海と海軍へのあこがれ

宮本常一は農村生活について「日頃の生活はいたって単調で、一本の道をはてしなく歩いて行かなければならないような日々である。そうした生活の救いともなるのが人々の集りによって人間のエネルギーを爆発させることであり、今一つは私生活の中で何とか自分の願望を果そうとする世界を見つけることであった」（宮本 1995: 40）と指摘し、前者の例では祭、後者の例では男女関係などを挙げている。岩田氏にとって、後者のプライベートな生活は海や海軍をあこがれることで満たされていたように思われる。彼は高小の2年間、夏休みに1週間ずつ地元

の海洋少年団に通って手旗や結索〔綱の扱い〕を習い、このころから海へのあこがれを抱いていた。

「うん、それ〔海へのあこがれ〕あったな、そういう気持は。で、そのときのあの、教えてくれる、まあ、いわゆる、先生な人が、海軍出身の人でさ、んでその、『俺は、成績が悪かったんで、木の船に、乗せられたんだ』なんて、そんな話をしてよ、いやー、あの、面白い話をしてくれる人だと思った。大体は、あ、そんなその、成績が悪くて木の船に乗ったとか、そんなことは言わねえわいな、かっこいいことしか、普通は言わねえけども、その人の、そういう話をして、みんな、を笑わせてくれたったので、すごく印象深かったなと思って」

圓入智仁は「戦前の海洋少年団では、英国のボーイスカウトやシースカウトに倣い、国家に有用な人材の育成を目指していた。……第2次世界大戦下の海洋少年団は、名称や少人数集団、海や船に関する知識や技術によって進級する制度を戦前から受け継ぎながらも、学校を単位とする、海軍の影響を強く受ける組織となり、活動内容も軍事的な色彩が濃くなった。戦争を前提とし、子どもたちを戦争に駆りだす準備を行う教育活動を展開した」(圓入 2011: 296-7)と指摘する。岩田氏が接した指導者は好人物であり、彼に海軍のよい印象を与えたようである。

さらに、兄は釜石製鉄所で働いていたが、昭和17年に志願して海軍に入っていた。休暇のために水兵長として帰省した兄の姿は、岩田氏に海軍への強いあこがれを抱かせた。

「最終的に、あの、(海軍を志願した) 動機ってのは、兄貴が、あの、戦地に行く、ということで、休暇もらって来たったんだな。そんなとき、いや、かっこいいなあと思ったっけなあ。その、軍服が。……あの、水兵服っていうのは、色もいんだよな。ネービーブルーって、いま、そんな、こと言うけども、色がいいもの」

彼が海や海軍にあこがれたのは、一つには海洋少年団の影響が、いま一つには海軍軍人となった兄の影響があった。このように、軍国少年としての彼は、海軍にあこがれを抱かせる軍国主義時代の様々なモードに感化され、ごく自然に海軍を志願することになっていった⁵⁾。

本章では岩田氏が海軍を志すまでの農村生活を概観した。当時の社会状況や先行研究を参照する限り、岩田氏が少年兵となった生き方は、寒村で貧困に喘ぐ農家の次男、三男が選べる当時の生き方の一つであった。この点を確認した上で、軍国少年の彼があこがれの海軍に入って兵士に成長してゆく過程を、彼のライフストーリーに基づいて辿ってゆこう。

3 戦争体験の「明るい側面」

3・1 「優越感」に浸った海兵団生活

昭和19年5月、岩田氏は海軍武山海兵団に入団する。戦争末期、海軍志願兵の告達員数はこの年次がピークで208,660名(飛行兵が106,660名)であった(海軍歴史保存会 1995: 22-3)。一般的に厳しいと言われる海兵団生活だが、彼は「いまして、結構、きつい思いもしたけども、楽しかったなあと思ってんだ、いまは」と振り返る。この「楽しかった」という思いは、「何でも競争させられる海兵団」(近現代史編纂会 2001: 16)の生活に張合いを持たたからである。

「俺、銃剣術うまかったんだよなあ。……そすとね、各教班から、模範試合させなさい、その要員を出しなさいって言うと、俺がね、何だか、うまいの方の代表なんだっけ」

衆人環視の中、模範としての指名を彼は誇らしく思ったはずである。また、海兵団教育の代名詞とも言えるカッター〔オールで漕ぐ大型ボート〕訓練でも、彼は張合いを持った。

「これまたね、俺左利きなんだよな。だから、左舷の一番前だったの、俺が。結局、何ていうの、左舷の一番前とそれ〔右舷の一番前〕が、左舷右舷共に、基準になるわけよ、その人に合わせて、その、後ろの人たちが、權を、操んだっけ、銘々。だから、左（舷）で俺が一番前で、何だべ、優越感もあったんだべな、あれな」

カッター後部に座る1番、2番の者は「ストロークといい、いちばん力があるポジションだった」（瀬間 1983: 44）。体力的に一番きつい位置を占めることに「優越感」を抱くあたり、補充の老兵などには思いもつかない少年兵の意気込みである。

「武山の海兵団、でも、みんな、我々の同期ってのは、みんな若いからなあ。（自分は）十六七だから、十八九ぐらいの人たちもいたったんだが、そういう人たちは、年寄りくさかったもんなあ、我々の眼から見ると。だから、甲板掃除だなんて、やっぱり、1週間に1回、海兵団でも掃除やんだね、これ、木の床だけでも。そこんどこ、机とかなんか全部片付けて、一列に並ばされて、水雑巾だったなあ。それで、拭くんだ。こうやって、しゃがんで、『一、二、三、四』。それでその、ぐるーっと回って、来るんだが、それ、（他人を）追い越したら立って（休んで）いいって、いうこと言われてたんだ。と、こうやって『はい、お前立て、お前立て』（と）立たされるべした。いつも俺、先の方だったなあ、立たされるのは」

彼には「百姓やったり、山仕事やったりして、体力には自信あった」という背景もあったが、十八、九歳の少年兵が「年寄りくさかった」という感覚は、16歳前後の少年兵のみなきる若さを物語っている。また、故郷の海洋少年団で教わっていた知識も有利に働いた。

「海兵団に入ったころだって、大体、手旗はもう、

自由に、書けたし、読めたったんだ。厳しかったよ、海兵団入ったら、手旗を、二、三回ぐらいこう教えっと、今度は、食事、昼ご飯が、並べ終わると、教班長が端っこの方において、書くわけよ、手旗で、簡単なやつよ。そうして、それを今度は、わかった人が、教班長の所に行って耳打ちするわけよ。すと『よし』って言われて、それで、食事ができんだから、そういう（正解の）人は。……これは俺はいつもあれだったよ、トップだったよう」

様々な競争で同期の少年兵の「トップ」に立てた海兵団生活は、単調な農村生活に比べて厳しくも充実したものであった。

「俺なんかの班長さんが、年とってる人でな、おとなしい人で、全然怒ったり、なんかできねえような人だったが、隣の13教班の班長さんっていうのは、この人は優秀な人だったんだべな、なあ。一等兵曹だったんだが、若くて、いやいい、ほんとの、スマートな海軍の、軍人さんだなあと思うような人だったんだ。バリバリバリバリつう人だったわよう。……何でも、バシバシ、その、怒ったり、指導したりしてる人だった。いやー、いい。で、ああいう人になりたいと思うことあったんだっけが」

「うちの班長さんが年で、優しい感じの人で、俺はあんまり、この、いいと思わなかったなあ。もう少しピシッとやってもらいたいよな感じだったんだっけが」

温厚な30代の教班長に不満を感じ、熱血の20代の教班長にあこがれる心情からも、少年兵の意気込みが読み取れる。学徒兵や補充の老兵ならば、教班長に対する評価は正反対になったのではないだろうか。優秀な高小卒業者の社会的上昇の志向と、何事も競争で実力が目に見える形で称揚される海兵団生活とが、岩田氏の中で見事に親和した。海兵団生活より「家で百姓やったり山仕事やったりした方が辛いわい」という語りに誇張はないと思われる。彼は張合

いを持って約3カ月の新兵教育期間を過ごし、海軍一等水兵を命じられて意気揚々と海兵団を巣立っていった。

3・2 淡い恋心——富山の女学生

新兵教育を終えた岩田氏は海防艦⁶⁾に配属となる。彼が乗り組むことになった海防艦は、昭和19年11月に富山で竣工。彼は9月から「艦装員付という命令をもらって」富山へ行き、宿舎から船渠へ通う日々を送っていた。そのころ、彼は淡い恋心を抱くことになる女学生と出会う。

「富山にいたときに、俺の(上官で)下士官の人で、前任下士官の人だったんだ。この人は、長野出身だったんだけど、よく面倒みてくれてたんだ、俺んところ。……もちろん下士官だから、下宿持ってたわけよ。俺なんかもちょうど、上陸が一緒の日になつと、『岩田、来い』なんて言われて、一緒に行ったんだだけ」

下宿には管理人の老婆が独りで住んでおり、彼女の親戚の女学生がちょこちょこ遊びに来ていたという。インタビューでは戦友会の折にでも呼べればと懐かしそうに語ったので、アイドル的な存在だったのかと質問したが、彼は照れを隠すように否定した。

「いやいや、そういうアイドルとか、彼とか彼女とか、そういう問題じゃない、全然ないんだけどさあ、ただ、一つの、若いときの、思い出、俺としては、うん。それで、だいたい横須賀に来てからでも、葉書のやり取りは、何か月ぐらいやったったのかなあ。20年の5月には、手紙をくれたったんだ。そこに、5月だったんだなあ、結局あの、小さい、鯉藏を、同封してくれたったけがさ、いやー、それ思うと、ほんと懐かしいなと思って」

もっとも、インタビューも終盤のころには、打ち解けて次のようにも語ってくれた。

「まだ女学生だったんだよな。俺なんかより一つか二つ多い人じゃなかったかと思う。……字の上手な人でな、(自分と比べて)とっても恥ずかしいぐらいだったんだ、うまい人だった。ちょっと小太りのした女の人で、うん。我々の感覚では、若いころは、やっぱり若干年上の女の人に惹かれたもんだけども、どうだった？」

筆者が「いまでも僕はそうですよ」と相槌を打つと、岩田氏は「あ、そう。いや、いいなあというような感じはしてやったよ。……包容力があるような感じの人だった。いい人だったがよ」と、しみじみ語った。まだ十六、七歳の少年兵には銃後の少女との交流が、厳しい軍隊生活における一時の清涼剤となっていたのであろう。

3・3 様々な役割に恵まれた軍隊生活

岩田氏を乗せた海防艦は、富山を出港後に対潜対空訓練を受け、横須賀へと回航された。戦記や彼の語りによれば、戦闘を含め敗戦まで様々な出来事があったわけであるが、ここでは彼の兵士としての成長過程を捉える上で、特に艦内生活(軍隊生活)の様子に注目してみたい。艦内生活では、衛兵隊や従兵、短艇員など役員と呼ばれる交代制の仕事があり(近現代史編纂会 2001: 26)、彼はこうした役員の仕事に張合いをもって精勤した。

「いや、面白かったね、あの、将校の、ほら、身の回り世話したり、食事世話したりする、従兵っての、いんですよ。……で、俺が担当したのは、会津出身の、W兵曹長だったなあ。……この人と、それから、岩手出身の、あの人は、T中尉って、砲術長の人ね。それで、風呂を、航海中以外は、将校は毎晩風呂に入るんだから。……士官の、士官の風呂、背中流して、くれたもんですね。で、食堂があつたら、その食堂で、ほとんど毎晩酒飲みだったんだよ。……で、それの、お給仕までやるようになるわけ、従兵ってのは。みんな、こういう長テーブルに向かい合

って座って、こう（飲食）やってるでしょ。で、こっちの方にね、従兵室って、小さい部屋あったのね。そこで、いまで言うと、電気ポットだなあ、あれで酒、爛して、それでその、徳利に入れて。……そすと、我々（食堂の）中にいて、こう注いで歩くでしょう。そすと、適当にその、残ってるときに、持って来って合図するわけ、（従兵室の）中から、従兵長が。……それで今度それをコップに入れて、それで、終わってみんな寝た後に、『ほら、集まれ集まれ』って、それでそれ飲まされるわけ。おこぼれを頂戴して、ハッハ。だから、いま思うと、いやー、そういう点は、面白いとこだなあと思ったねえ」

彼の語りには、士官の特権待遇を批判し、戦局の厳しさや娑婆の食糧難にもかかわらず酒宴を繰り返すことへの憂えはない。むしろ、従兵の役得を素直に面白がり屈託がない。

彼は前任伍長室当番にもなった。巡検時に前任伍長が烹炊所で不備を指摘し「気合かけとく」と、後で「食べ物寄こしてくれたいけんかすんだっけ。いや、んだから、そういう、裏話で、楽しいこともあったんだなと思って」。新兵はこうした海軍のインフォーマルな文化を先輩から楽しく学び、一人前の兵士に育ってゆくのである。

彼は公用使にもなった。瀬間喬によれば、公用使は郵便物の受け取りなどをする部隊の使いで、「仕事を終わると、帰艦する定期（交通艇）まで時間があるのが普通であったので、公然というわけにはいなくても、餅菓子屋で大福をほおばることもでき、まんざら悪い役目ではなかった」（瀬間 1983: 77）。岩田氏はこうした役得について、「そういうのはなかったけども、まあ、当時では、自負心はもってたな」と語る。

また、彼はカッターをダビット〔カッター等の昇降に使う腕状の支柱〕に固定する際、常に指名されるほどロープさばきが得意だった。

「個人的になるけども、何となく、俺は、少しは、

同年兵あたりから見ると、恵まれたような感じも受けてたつたからさ。結局ほら、従兵、やったり、前任伍長室当番やったり、公用使にやらされたり、あとは、出入港のときは、第一線のほら、錨甲板に出て、これやれあれやれなんて、やらされたり、ポート降ろすときは、やっぱり、いつか言ったように、こういう、いろんな、ロープの操作、させられたり、みんな、の方は、こう引っ張ってポートを揚げる、仕事すっけども、俺はそうじゃなくて、別な所で、一人でやる、仕事させられたり、してたつたから、んだからねえ、ある程度恵まれたつたなあと思って、いま、そう思っつけてもさ。だから、日常生活には、そう不満はなかったなあ。ただ、眠いと思つたなあ」

4 戦争体験の「暗い側面」

4・1 「バッテリー」による私的制裁

しかし、艦内生活は楽しいことだけではなかった。岩田氏が乗り組んだ海防艦には、仲のよい同期の新兵AとHがいた。岩田氏が体調を崩して寝ているときなど、そっと握り飯を差し入れてくれる心強い戦友達だった。

「で、船に乗っていると、あの、最初はほら、船酔いで、辛い辛い思いすんのね。そんなときだったなあ、……（上官は）俺なんかの三人のこと、三羽烏だの、三勇士だのって言ってくれだつたのね。……それで、よく、ちよくちよく、みんな寝た後、集まって、いろんなこと、しゃべった記憶あるがね。で、ここの、こっちの方〔船尾〕に行くと、ほら、このように、スクリューで、ほら、波がこう渦巻いて、真っ白になるでしょう。夜でも、夜光虫なんかで光んの。いやー、こんな辛い思いするんだつたら、いっそのこと、飛び込んだ方が（いいような）ことしゃべったことあったよ、みんなで、三人で。……二、三人でね、そんなこと、辛いから、えー、飛び込んで、死んだ方がええようなことか、言った記憶あるねえ。

で、そういうときに限って、やっぱり、あの、両親や家族や、親類の人達のこと、まぶたに浮かんできたような記憶あんない。やっぱり、そういうことをすることによって、みんなに迷惑がかかるからって、というようなことで、思い直すようなことがあったね]

いずれも17歳前後の壮健な水兵達である。船酔いの辛さだけで投身は考えないだろう。「そんなに、深刻に、思い悩むっていうのは、何が一番辛いんですか」と問うと、彼は次のように語った。

「やっぱり一番辛いのは、あれでねえの、勤務が辛いね。航海中の、警戒警備に立つときなんてのは、寒いし、眠いし、食べ物も、そう悪くはなかったけども、量は少なかったね。……井で何杯も食べたいころだもの。あとはあれだなあ、海軍はその、陸軍もあったろう、制裁、あったろうけども、海軍の制裁ってのは、いわゆる、有名なバッタ、あるでしょ?」

筆者が「バッタ? いや、初めて聞きました」と答えると、彼は「あ、そう。だけどもね、こうゆうのは、あんまり誰もしゃべんねえと思うんだよなあ」と言う。筆者が「何ですか」と問うと、彼は「うん、結局、自分の、いた、所の、悪口になるでしょう」と答えた。船酔いや寒さ、睡眠不足や食事の量の乏しさなども挙げてはいるが、声を潜めて語り出した「バッター」による私的制裁の過酷さこそ、彼らが投身を考えた真の原因と解釈できる旧日本海軍の「暗い側面」である。

旧日本海軍では「バッター」あるいは「軍人精神注入棒」と呼ばれる槥の棒で下級兵の臀部を殴打する私的制裁が横行した⁷⁾。河野仁は私的制裁の「機能」について、「私的制裁は日本軍組織における一種の「病理現象」であって、古参兵のうっぶん晴らし以外のなにものでもないという見方」と、「私的制裁によって「鍛えられた」者でなければ戦場で役

立たないという……「ストレス耐性向上説」の立場」(河野 2013: 88-9)を挙げている。前者を軍隊における私的制裁の否定的評価、後者を肯定的評価に分ければ、岩田氏のそれは両者の間で揺れ動いている。

「やっぱり、絶えず(兵を)緊張、させるような状態じゃなかったの。結局、ちょっと弛んでたり、なんかして、例えば、敵の魚雷を見逃したり、浮遊機雷があんの、見逃して、自滅するようなこともあるんだというようなね、そこまで(私的制裁のときは)言わないけども、そういったようなことで、日頃からも、絶えず、船に、何とか、船の安全に、心がけろとか、そういうようなことだと、私は解釈してんのね」

これは乗艦の防護に直結する私的制裁の肯定的評価である。しかし、彼は私的制裁の否定的評価も語っている。私的制裁の担い手は水兵長であった。

「兵長でも、なかなかその、下士官になれねえよな、海軍ではお茶ひきって言っただけ、お茶ひいてるような人たちよ。これ[バッター]で、鬱憤晴らすんだべ」

「でね、その兵長で、さっき言ったお茶ひきの兵長が、先頭になってそういうことやるわけさ。ほで、さんざんばら、これをしゃべってな、『烏の鳴かない晩があっても、艦隊には、甲板整列のない晩がないんだ』なんて、どこで覚えてくるんだか、そんなこと言った」

「何でここまでやんなきゃいけないんだろうなとは、思うことあったなあ。同じ人間で、い、痛かったもの」

「その(農村で)山仕事したりなんかするのは、一つには目標があっぺした[あるでしょ]。これをすることによって、金になるとかさ。海軍の場合のバッターには、お返しての何にもねんだもんな。……見返りが。ただ、青筋が立つぐらいのもんで、

尻に。だから、銭湯に行きたがねえの、恥ずかしくて。入湯上陸だの、上陸してるときよ、嫌なのよ、だから」

岩田氏の私的制裁に対する解釈はこのように多様であるが、肯定的・否定的評価を折衷するような、次のような解釈もある。

「そりゃあ、ある程度ねえ、やむを得ねえところもあんのね、その、海軍なら海軍の伝統的なところもあるから。うーん。人を殴るなんてのは、決していることじゃねえだろうけども、一般の、職務、を、やってる、職務に就いてる人と、違うからね。やっぱり兵隊さん、軍隊、というのは、組織が違うところなんだからやむを得ねんだ」

「海軍の伝統」という価値意識により、私的制裁に対する彼の解釈は落ち着いたように見えたが、繰返し語られた次のエピソードは、なお彼が私的制裁について釈然としていないことを物語る。ある軍港に損傷した軍艦が入港してきたとき、彼は忘れられない甲板整列の光景を目撃した。

「ここ〔舷側〕にこう、こんな所に、防水マットってあんですよ。それをぴったり、貼り付けて、それで入ってきたんだっけ。そのうちに、今度は、係留終わったら、遺骨〔白布に包まれた骨箱〕が次から次へとこう、出てくるわけ。……遺体じゃなくて、もうどっかに火葬して持ってきたんでしょう。あるいは、水葬しちゃうんだらうから、遺留品かなんかね。そうふうにして、持って来るんだらうけども、そのわきの方で、今度は、甲板整列で、こうぶん殴られてるんだ。……いやー、すごいなと思ったね、あんときは、うーん」

筆者が「すごいっていうのは？」と問うと、彼は「いやー、その、悲しみ、とか何か、思っておれねえなあなんて思ってねえ」と答えた。また、彼は「や

っぱり、あの、みんなで、あの、哀悼の意を、表すということ、見送ったらえがったんじゃないかなあと、そんなときは、そう思ったんだけどもね。その後で（私的制裁を）やられんならいただろうけども」とも言う。軍隊の論理を納得しようとする反面、それに疑問や反発を感じる心。もっとも、これらの解釈は事後の意味づけであり、その現場を目撃した瞬間は、「いいとか悪いとかって、そういうもんじゃなくて、……ただ、その光景に、啞然としてるっていう感じじゃねえのかなあ」というものであった。

4・2 戦局に対する不安

戦争末期、誰の目にも日本の劣勢は明らかであった。岩田氏も娑婆の食糧事情の悪さや本土空襲の激化に直面し、「負けるとかなんて、そこまでは考えなかったけども、これでいいものかというような感じはしたったなあ」という。食糧難や空襲以外で戦局を不安に思うようなことはなかったのだろうか。

「まあ、特に俺なんか、ほら、外地に行かなかったからなあ。だから、それほど、深刻な、状態ってのは、わかんなかったんじゃないのかなあ。あー、こういうこともあったね、一つあの、南方の兵隊さん、ちいせい島にいる兵隊さんに、食糧輸送するのに、潜水艦の背中によ、ドラム缶に米詰めたり、それから、ちょっと厚めの、ゴムの袋に、米を詰めたりして、それを潜水艦の後ろの方にこう、積み重ねて、ロープかけて、持ってったような見たよ。……そういうの見たときは、何ていうかなあ、言葉では表せねえが、何だが、寂しい思いしたっけな」

「寂しい思い」とは、「こういうことまでして、その、あの外地の兵隊さんに、物資輸送しなけりゃ、何ともなんねんだらうかっていうような」気持ちのことである。制海権・制空権を米軍に握られ堂々とした輸送船団を送り出せない現実。大日本帝国海軍の斜陽を象徴する光景に、「こんなことでいいもんだべがと思うようだったな。そういう、感じ、持つ

たっけ」という彼だが、死線をさまよう戦闘体験をしても、戦争に敗けるという確信は持たなかった。

4・3 戦闘体験

戦記や他の乗員の手記を参照する限り、少なくとも岩田氏は6回、米軍の潜水艦や航空機による攻撃を体験したはずである。しかし、彼が語った戦闘体験は、昭和20(1945)年8月6日にあった対空戦闘のみである。彼の戦闘体験についての語りも、その激しさや交戦回数に比べて簡略化、パターン化した語りとなっているのは、凄惨な記憶の抑圧のためと思われる。彼の乗艦は同日午前中に外房方面に機雷を敷設、その後房総沖で米軍機と交戦となり、艦は大きく損傷、浦賀ドックに回航して修理を行うことになった。「いやー、もう、そっちにもこっちにも、こう、機銃の弾痕がいっぱいあったんだ。いや、恐ろしいもんだと思ったけが」。

1回目インタビューでは戦闘場面を語ったわけではないが、その晩に彼は戦闘の夢を見た、2回目インタビューの冒頭で語った。

「昔はしょっちゅう夢に見てたの、その、戦闘場面を。……だけでも、しばらくそういうのなかったなあと思ったけども、この間、あなたと昔の話をしたら、やっぱり、昔のほら、あの、艦載機の銃撃を受けているところね、夢に見て、一生懸命逃げて、逃げ隠れるんだけども、どこまでも、その、飛行機が追っかけてくる夢、だったの」

戦闘場面の「悪夢」を繰返し見るなど、「戦争体験にともなうストレス反応症状は、……最近では、こうした症状は「PTSD (post-traumatic stress disorder)」すなわち「心的外傷後ストレス症候群」としてとらえられている」(河野 2013: 318)。彼の戦闘配置は海防艦中央にある25ミリ3連装機銃で、「中銃のねえ、一番手っていうやつで、こう、何ていうかなあ、弾を装填したりなんかする役目だったの」。そこで、彼は次のような光景を見た。

「『総員、配置につけー』って、号令がかかったんだけどさ、それで慌てて、こう(甲板に)上がってんだ。……そして、こう見たらば、ここんこ[煙突の後方]に、(銃身)1本のやつ[25ミリ単装機銃]、これは2人いるんだけども、射手と1人が、弾薬手っていうやつと、えー、で、射手の人が若い人だったんだが、弾薬手だっている人、30ぐらいの人だったのかなあ、こ、直撃弾、受けてよ、腹に、で、ここにごろごろってやったんだよ、『痛い痛い痛い痛い』って。……それで、あと、こっから、ここに行つて、こっちの方[艦橋付近]見たら、何かその鉢巻したりよう、血、顔に流してたり、する人いたったなあ。そういう人がいたなあと思って見た」

修羅場と化した甲板。彼は硝煙弾雨の中で何を思っていたのだろうか。

「艦載機が、銃撃してくるとき見ても、(海)水の上から、ポツポツポツポツと、ほら、あの、弾のあれ[着弾]が、水しぶきが上がるでしょう。あのまま来たら、俺にも当たって、痛いだろうなあっていうふう思ったよう。死ぬとか何とかっていうことは考えなかったけども、痛いだろうと思ったなあ、弾当たったら。そういう感覚だったよう。……鉄兜被ってやんだけど、その上に、手上げるくらい感じだったかんね。あ、弾、飛んできたなあって」

「戦闘機なんか機銃、発射しながら来るでしょう。と、いつも俺思うんだが、5発目に、曳光弾って、火の玉みたくの飛んでくんだよ。これ、小銃なんかもそういうふうにしてんだけども。それが、この、全部自分に向かって、来るような感じするわけさ。向こうからほら、撃ちながら来るから。と、あれ、弾当たったら痛いんだべなーと思ったりして、その程度の、ほんとに、幼稚なことしか考えられなかったなあ」

河野は「日本軍の兵士の「恐怖心への対処」の事

例を整理してみると、「恐怖心」への有効な対処法には大きく分けて「受動的」と「能動的」対処法の二通りがあり、「受動的対処法」は心理的防衛機制により恐怖心そのものを否定してしまう「否認（denial）」、または無意識に「抑圧（suppression）」する方法が典型的な対処法であった。……攻撃精神が過度に強調され恐怖心を覚えるのは「臆病者」との烙印を押されかねなかった日本軍では「否認」が最も一般的な恐怖心への対処法となった」（前掲：177-8）と指摘する。歴戦の兵士のように、自分に弾は当たらないと自己暗示によって恐怖を「否認」する術を持たなかった岩田氏。まだ少年とも言える彼は恐怖と諦観とが入り混じった思いで、水柱となつて迫ってくる着弾を凝視していた。

そんな彼も、死線をさまよう体験を繰り返すうちに「否認」などの対処法を身に付けて一人前の兵士へと成長を遂げたことだろう。だが、敗戦と共に、海軍軍人としての彼のキャリアに終止符が打たれた。

5 復員体験

5・1 復員輸送業務

敗戦を知ったときの岩田氏の心境については聞けなかったが、復員輸送業務に従事するため、特別輸送艦に指定された古巣の海防艦に戻ったときの屈託がない語りから推測して、彼は敗戦にさほどショックを受けなかったように思われる。敗戦から2週間後には、彼は復員して故郷に戻っていた。

「それで、家に帰ってたら、10月の何日頃だったかなあ。ラジオ、新聞等で、これこれの軍艦に乗ってた人は、復員輸送のために、浦賀の引揚事務所に、援護局だったかな、に集合して下さいなんて、その気になって俺もまた行ったのよ。……今度は戦争じゃねえから、どっか行って遊んでもこれんだらうべと思って、ハハハハハハ、甘い甘い」

特別輸送艦が向かった先は太平洋西部、カロリン

諸島のエンダービー島であった。

「それで、島が見えて、それから島から何キロか、何キロってそんなにもねえなあ。1キロ以内ぐらいなのか、とっかなあ。そこに、投錨、いわゆる錨下ろして、そこで待機してるわけさ。そすと、アメリカの、上陸舟艇みたいなやつに、日本の兵隊さんが、おんぼろの兵隊さんが乗っけられてよ。で、俺なんかの船に、係留してて、そこで、乗り移ってさ。何時間以内に引っ越しなさいって、なに、遊ぶ気分、観光気分で行ったのに、全然駄目」

敗戦を知らされ、また多数の戦死者が出る激闘からわずか2カ月程度で、「物見遊山ぐらいのつもりで行ったのよ」という心境になれたのは、彼一人ではなかったろう。彼のように気持の切り替えが早くできることこそ、戦争を支え、そして戦後復興を支えた人間の「たくましさ」である。

5・2 官給品横領に加担して帰郷

敗戦直後の旧日本軍将兵による官給品横領の話は枚挙にいとまがない。岩田氏はエンダービーから帰投してすぐ、かつての上官から官給品横領の手伝いをするよう指示された。

「あの人は、二等兵曹だな、下士官。いや、狡賢いような顔してる人なんだ。……浦賀に着いて、復員輸送してきた兵隊さんを揚げて、その夜だったと思うんだな、そのI兵曹が、俺とかAとかHとか、1分隊の若造を集めてよ。……で、『カッターでこれからこれあそこ運搬すんだから手伝え』なんて言われて、『はい』なんて。で、米とか小豆だったんだな」

ところが、すぐに横領は発覚してしまい、岩田氏らは艦長室に呼ばれ正座して説教を受けた。

「それでその『お前たちは、こういうことやったから、残念だけでも戸籍を汚すようになるかもしれ

ない]なんて言われて、いまでもその言葉覚えてっけどもよ。……俺の縁故親類には、そういうのはいまだかつていないなと思ってよ、それで、とにかく、これ以上、船にでもみんなに迷惑かけられない、辞めさせてくれってことで、そんで辞めて帰ったんだよ]

5・3 警察予備隊に入隊するまでの故郷での様子

岩田氏が復員輸送業務に従事したのはこの一回だけで、後は昭和25年に警察予備隊に入隊するまでの約5年間は、故郷で過ごすことになった。

「だから、俺が17(歳)で復員してきたとして、その間にちょこっとエンタービーに来たけども、それから22(歳)まではそういったようなことだけはした、百姓やったり、山仕事やったり、たまには土方に行ってみたり。だから、何でもやれることはやったよ]

こうした戦後の生活は軍隊生活に比べて「辛かったわい」という。特に山仕事は厳しかった。

「船材ってさ、松の木のこんな(大きな)やつとかを、うちの方では木馬[きんま]って言うんだけど、櫓よ、櫓で引っ張るわけよ、それ載っけて。そすと、案外、荷物積んで来たときはいいわけよ。荷物降ろすと、山までまた行くべした。その木馬を背負ってくんだから、これが大変よ。……だから、俺それ言うわけよ、あれほどは海兵団もきつくなかったってことは。……金にはなるのよ。いや、その代り並大抵じゃない、いまの若い人は動まんねえわい。一回これ担いだけで、は、終わりだ、『辞めた』って言うようになるよ]

彼が警察予備隊を志願した当時の心境、動機は聞けなかった。だが、戦後の農村での肉体労働の厳しさを軍隊生活と比較して強調する語り方から推測すれば、彼は眼前の重労働よりは、警察予備隊の訓練

の方がまだましだと判断して志願したと思われる。そこには、ネービーブルーの水兵服にあこがれたような気持は、もはやなかったであろう。

6 考察

ここまで、岩田氏の生き立ちを概観し、彼の戦争体験の「明るい側面」と「暗い側面」、そして復員体験について、彼のライフストーリーを再構成して見てきた。彼は、戦争体験の「明るい側面」と「暗い側面」とを語り、戦後に警察予備隊に入隊したことは生活の必要性に迫られた選択であったことをほのめかしている⁸⁾。彼は自らが置かれていた当時の社会状況下で、どのように行為したのか比較的冷静に語ったと言える。

彼の語りは、筆者が戦争体験の「明るい側面」や「暗い側面」のいずれかを優先的に語るように求めてのものではなく、彼が自らぼつりぼつりと語ったものである。もちろん、彼は戦争体験のすべてを語り得たわけではない。例えば、彼はインタビュー後の雑談でふと、戦死者を運搬した体験に触れ、戦死者の手足を引っ張ったら関節が外れ、その感触がいまも生々しいと語った。だから、戦闘体験については“語っちゃくねえのよ”と短く言い添えた。この言葉から、戦争の「暗い側面」はまだ語り得ていないという彼の思いが伝わってくる。この点で、彼の語りは部分的な回想にとどまるが、それでも彼が戦争体験をどのように意味づけていたのかということは、彼のライフストーリーを再構成することで知ることができた。彼の戦争体験の意味づけの特徴として、以下の点を指摘することができる。

6・1 「戦争責任」の希薄さ

まず指摘できる点は、岩田氏には自己の「戦争責任」の意識は希薄であるということである。

彼は「その頃は、ある程度、何とか、洗脳されてるからだけでも、いまは、ほんとに、もう、別な角度で、もの、考えるようになっからない」と、戦時

中の自身の思想傾向は「洗脳」されていたと語った。これは序言で触れた渡辺清の「欺されていた」という認識とも通底する受動的な説明だが、彼のように「洗脳」されていた「自己責任」を能動的に問う語りはなかった。岩田氏によれば「洗脳」とは「国の礎となること」であったという。「その頃で言えば、それは当たり前のこと、だったのよ。何も、特別に、変わった、その、思想を持ってる人間とは思わなかった。それ以外の、思想を持ってる人は、おかしかったな。……我々の方は主流だったんだ。ハハハハ。いまになると、バカみたいだって、言われるだけだ」と、自嘲する形で一種の笑い話としている。

渡辺清が受動的な戦争加担の説明では納得せず、さらに戦争を支えた「自己責任」へと突き進んでゆけたのは「狂信的といってもいい天皇主義者でしたから、敗戦後の天皇のありかたは腹にすえかね」（渡辺 1981: 224）たというきっかけがあった。ファナティックな皇国少年であっただけに、天皇とマッカーサーとが並んだ写真を見たとき裏切られたと憤激し、そのことが彼の思索の原動力となった。岩田氏には、このような強烈な契機はなかった。

また、吉田は1970年代に「海軍史観」が確立し、「海軍史観は、今日に至るまで日本社会の中で大きな影響力を及ぼしており、そこには日本人の戦争観のある部分が凝縮されている」（吉田 1995: 183）と指摘する。吉田によれば「海軍史観」の特徴的論点は、①「超国家主義的で侵略主義的な陸軍に対する抑止力、あるいは抵抗勢力として一貫して機能したという主張」と、②「海軍軍人と海軍という組織の自由主義的で合理主義的な体質の強調」にあり、①に関連して「海軍の戦争責任が完全に否定されているのが特徴的である」（前掲: 146）という。

岩田氏が自身の「戦争責任」について自問する態度が希薄だったのは、「海軍史観」の影響もあったのではないだろうか。実際、彼は阿川弘之の著作を読んで感銘を受けていたようである。

6・2 サバイバーズ・ギルトの希薄さ

次に指摘できることは、岩田氏にはサバイバーズ・ギルトの意識も希薄であるということである。

杉原によれば、サバイバーズ・ギルトの構造的特徴の一つとして「その主体は心理的な次元である特定の他者と関わっている」ことを挙げ、「そもそも、もし我々が心理的な次元で他者と関係していないなら、たとえ物理的な次元では関わりを持っていたとしても、こうした罪悪感を感じることもない」（杉原 1996: 24-5）と指摘する。岩田氏の場合、上官から「三羽烏だの、三勇士だの」と言われて特に仲のよかった2人の同期の戦友は生き残った。加えて、彼の兄も戦死せずに復員することができた。

また、杉原はナチスによるユダヤ人強制収容所の生存者の事例をいくつか挙げており、誰かが自分の身代わりになってくれた、誰かを助けなかった、誰かを裏切ったというようなサバイバーズ・ギルトの内容も紹介している（前掲: 18-20）。岩田氏の場合、彼自身が最も危険な露天甲板で米軍機の攻撃の矢面に立つ戦闘配置に就き、こうした感情が生じる状況にも直面しなかった。

こうした背景から、多くの同僚を失う戦闘を体験しながらも彼にはサバイバーズ・ギルトという心理現象が希薄だったのだと考えられる。もちろん、サバイバーズ・ギルトの希薄さは、あくまでインタビューによって得られた彼の語りには見いだせなかったということである。筆者の質問によっては、彼もこうした感情を語ったかもしれない。実際、彼が直面した戦闘での戦死者には、彼が体調を崩して寝込んでいるときに握り飯を差し入れてくれた四、五歳年上の同郷の先輩S兵長がいて、岩田氏は彼を「友達」とも表現している。

ただし、杉原が「この罪悪感、通常の合理的・論理的な思考とは異なったレベルに発している」（前掲: 19）と指摘しているように、サバイバーズ・ギルトという心理現象は複雑である。岩田氏の場合、サバイバーズ・ギルトとは異なる心理的結び付きで、仲のよかった戦死者とつながっていたのではないだ

ろうか。それは例えば、次節に見るように、戦争で自分が生き残ったことを素直に感謝して前向きに生きてゆく態度と関連しているように思われる。

6・3 生きていることへの素朴な感謝

岩田氏の戦争体験の総括的な意味づけを見出せるとすれば、彼がぼつりと漏らした次の語りに、その心情を読み取ることができる。

「まあ、あれだな、まとめて言う結論としては、やっぱり、辛い思いもあったろうし、怖いも若干あっけども、こうして生きてるってことは感謝だな。何にも感謝、の一言に尽きるわ」

敗戦時にまだ少年であった彼が戦争で生き延びた幸運を素直に喜ぶ気持は、ごく自然である。ただし、彼のこの素朴な気持は、戦争や軍隊生活に対する批判に結びつくものではなかった。戦後、彼は戦友会の幹事を務めたが、私的制裁の厳しかった上官が参加しなかったことについて次のように語っている。

「その、当時は当時で、いまとまるきり違う、あれだから、世情だからね、何もそんなこと、いつまでも考えてねえで、出てきて、みんなでその、昔話でもしたらどうかと思うの。みんな、当時のことは、恨んでどうの、逆恨みしたりなんだかってのないですよ」

彼は私的制裁を語った場面でさえ、「でも、こうして、こう目をつぶってそのころのこと瞑想すると、懐かしいわな、懐かしいことは」と語っている。

また、生きていることに素朴に感謝する彼の気持は、復員後の失敗談を笑い話としてまとめる態度にもよく表れている。官給品横領に加担して帰郷したことについて、彼は次のように語っている。

「だから、そんなこと[官給品横領の加担]でもなければ、もしかしたらさ、海上保安庁あたりの職員

になってたかもしれねんだ。現になってるやつがいたんだから。……だから人間ってのはわかんねんだな。ただ、まあ、こうして生きてきたから、昔の笑い話で終わるけどもよ」

このような語りだけを見ていると、彼は戦争体験の否定的な側面を水に流し、寛容で屈託がないように思われる。そして、こうした彼の態度を批判することは容易である。例えば、渡辺清は「戦争のことも一過性の台風のように過ぎてしまえば、もうそれで忘れてしまうような、そういう弱さというか、もろさというのがありますね。水に流すというのは、大事な問題をいい加減のところまで外して避けていくということで、弱さと逃げの裏返しなんだと思うんですけども、そういうあっけらかんとした、こだわりのなさがひとつの美德としてあるというのが、戦争の体験を問題にしていく場合、おさえていく必要があると思いますね」(渡辺 1981: 180)と述べている。

岩田氏が戦争体験から得た人生観は、渡辺清の視点からは「流しの思想」として批判されるものであろう。岩田氏の戦争体験の意味づけには、「戦争責任」やサバイバーズ・ギルトの意識が希薄で、声高な戦争批判もない。ただ、戦火を潜り抜けて生き残ったことへの素朴な感謝の気持が強調されただけである。では、彼の戦争体験をめぐるライフストーリーからは何も学ぶことはないのだろうか。そうとは思われない。それが何であるのかを述べて、本研究を結びたい。

結語

岩田氏の戦争体験に基づくライフストーリーは、既に見てきたように、①戦争体験の「明るい側面」、②戦争体験の「暗い側面」、③復員体験と分けられる。こうした様々な側面を含む戦争体験のなかで、彼にとって最も懐かしく意味深かったことは、軍隊生活の日々における仲間との競争や交流、銃後の思

いを寄せる人との交流、軍律が厳しいはずの軍隊で兵士に束の間の楽しみを与えてくれるインフォーマルな軍隊文化、選抜された軍務をこなしてゆく達成感など、戦争体験の「明るい側面」であった。そして、戦争体験の「明るい側面」の源流にあったと思われるネービーブルーの水兵服にあこがれたような気持も、戦後の歩みのなかで燻り続ける力のあったことを、彼の次の語り示している。

「俺、最近、だからあの、昔、海軍の、こないだいつか、見せたようなやつ、読み直してだ、何回読んでも、いや、なかなか飽きねえなと思って見てんだけどあの、戦艦・巡洋艦・航空母艦・駆逐艦の順序に、ほら、書いてあっぺしたあの本。写真を見て、ほんとに、わくわくするぐらいだなあ。特にあの、重巡の、この舳先と、それから、マストな、前檣ってのあっぺした。あの格好を見つと、ほんとにな、わ、素晴らしいなと思ってなあ」

もちろん、彼に戦争を美化するような考えはない。彼は雑談の折にぼつりと“戦争はしては駄目だ”と述べたことがある。何より、彼は陰惨な私的制裁など軍隊生活の「暗い側面」を生々しく語り、凄惨な戦闘体験も語っている。ただ、それでもやはり、しみじみと懐古してしまう楽しかった少年兵時代の思い出や、自然と吐露してしまう、軍艦群の偉観に対するあこがれ。特に初めて社会に出た少年にとっては、軍隊での日常生活は張合いのある世界であったので、彼は懐旧談として語ったわけである。少年が軍事的シンボルに対して抱くあこがれや、軍隊生活で持つ素朴な張合いといったものが、結果として戦争を支える下からの力として回収されてゆく様相などは、本研究で示したように、懐旧談としての戦争体験によってこそ、当事者の生き生きとした視点から深く理解することが可能となる。

戦争体験とその意味づけには多様なものがあるにもかかわらず、新聞やテレビなど主要メディアが繰返し伝えるのは「悲劇」や「反戦」を前面に訴える

ライフストーリーであり、今日それらは戦争体験を伝えるマスター・ナラティブ⁹⁾となっている。しかし、岩田氏のように懐旧談として戦争体験を語ったライフストーリーも、戦争体験のマスター・ナラティブに劣らず、戦争という社会現象をより深く理解してゆくための有効なテキストと成り得るのではないだろうか。

注

- 1) 本研究の語り手が志願した時点で警察予備隊を軍事組織と認識していたかどうかは聞けなかった。渡辺雅哉・植村秀樹によれば、「警察予備隊は現場レベルで見ても、発足当初は名実ともに警察力を補完するコンスタビュラリーであったこと、それが情勢の変化に伴う政策の変更によって、「侵略対処型」の部隊へと変貌していった」（渡辺・植村 2007: 48）というから、語り手には軍事組織を志願したという意識は希薄だったかもしれない。ただし、「警察予備隊は保安隊への改編までに合計7期にわたる定期訓練を実施したが、……第5期の訓練目標から大きく変化し、警察行動というよりも軍隊としての戦術行動に移行した」（前掲: 43）わけであるから、語り手は警察予備隊が次第に軍事組織の性格を強めてゆく様を肌で感じていたと思われる。
- 2) インタビューを始める前月にイラク戦争が開始されたわけだが、岩田氏は特にイラク戦争に言及することはなかった。また、インタビューを行っていたころは、イラク復興支援特別設置法めぐり与野党の論戦が繰り広げられていたが、彼はそうしたテレビのニュース映像を見ながら“何で野党は批判ばかりで政府に協力しないんだ”と、少し苛立って話した姿が印象的であった。
- 3) 戦争体験が戦後の生き方に与えた影響としては、彼はインタビュー後の雑談でふと、自衛隊での訓練など旧海軍に比べれば大したことはなく、“こっちは海軍水兵出身だかん”と語ったことがあった。過酷な戦争体験を乗り越えてきた旧軍出身者であることの自負を垣間見た思いがして印象的であった。
- 4) 大門は「農村に定着した小学校教育と1920年代

にあらわれた教育熱の趨勢は、恐慌期にも後退することがなく、衣食住や電灯料・医療費を節約しても、教育費は削減せず、子どもに尋常小学校を卒業させ、さらに高等小学校にまで通わせる傾向が継続してあらわれた」(大門 1994: 253-4)と指摘する。岩田氏も義務教育後に高小に通って卒業できたわけだから、この点でも彼の実家は最下層の農家というわけではなかったことがわかる。

- 5) もっとも、軍国少年が軍人を志す背景には、下士官としてのささやかな社会的上昇を目指すために軍隊を利用する実用主義的な側面があったことも見逃せない。吉田は若者が社会的上昇のための通路として下士官を選択することについて、①「就労機会の少ない農家の二、三男にとって、下士官は魅力のある職業」、②「多くの兵士の上に君臨し、身のまわりの世話の一切を初年兵にまかすことのできる生活は、それなりに快適」、③「退職や現役満期となった時に支給される軍人恩給や退営賜金も大きな魅力」、④「下士官という階級が地域社会の中で持つ威信の大きさ」、⑤「現役志願は、とりわけ不況期には、魅力のある選択肢」という意味づけを指摘する(吉田 2002: 87-94)。岩田氏は海軍を志願した動機として、こうした意味づけを語ってはいないが、「『将校商売下士官道楽、お国に尽くすのは兵のみばかり』なんて。……下士官は楽しいわい、こりゃー」と語っているように、従軍中には下士官として勤め上げる実用主義的な魅力に気づいていたようである。
- 6) 岩田氏が配属されたのは戦争末期に急造された第一号型(丙型)海防艦で基準排水量745t、乗員125名。瀬戸利春によれば「実はレイテ沖海戦から終戦までの間で、最も活躍した水上艦艇は海防艦なのである。……排水量は1000トンに足らず、主砲も12センチ高角砲にすぎない海防艦が主力というのが末期の日本海軍の実情だった」(瀬戸 2005: 9)。
- 7) 当然、私的制裁で死亡する場合もあった。例えば、海軍特別年少兵として針尾海兵団で教育を受けていたころについて、次のように書いている者もいる。「殴るなどというなまやさしいものではない。カシの棒が折れたこともあった。殴られたのがもとで肛門が開いて死んだ戦友もいた。臀部

はたえず内出血しており風呂場では互いに目をそむけたものだった」(ノーベル書房編集部 1980: 91)。

- 8) 大江志乃夫は「官僚機構である幹部群のもとに統率された、破格の経済的条件にとびついて応募した傭兵群からなる三流装備のよせあつめの警察軍というのが、警察予備隊成立期の実態であった」(大江 1982: 67)と述べている。なお、加藤陽三によれば「結局は7万5千名の募集に対して38万人以上の応募があった」(加藤 1979: 24)という。
- 9) マスター・ナラティブの考え方については桜井・小林編著(2005)を参照されたい。

参考文献

- 圓入智仁, 2011, 『海洋少年団の組織と活動——戦前の社会教育実践史』九州大学出版会。
- 逸見勝亮, 1990, 「少年兵史素描」『日本の教育史学』33: 112-32。
- 一ノ瀬俊也, 2006, 「皇軍兵士の誕生」倉沢愛子ほか編『戦場の諸相』(岩波講座 アジア・太平洋戦争 5) 岩波書店, 3-31。
- 岩手放送岩手百科事典発行本部, 1988, 『新版 岩手百科事典』岩手放送。
- 海防艦顕彰会, 1982, 『海防艦戦記』原書房(発売)。
- 海軍歴史保存会, 1995, 『日本海軍史 第5巻 部門小史(上)』第一法規出版(発売)。
- 海軍特二期兵科若潮会, 1998, 『海軍特別年少兵の手記——歴史への証言』ふく出版。
- 加藤陽三, 1979, 『私録・自衛隊史』「月刊政策」政治月報社。
- 河野仁, 2013, 『〈玉砕〉の軍隊, 〈生還〉の軍隊——日米兵士が見た太平洋戦争』講談社。
- 近現代史編纂会, 2001, 『海軍艦隊勤務』新人物往来社。
- 小林孝裕, 1980, 『海軍よもやま物語』光人社。
- 楠本雅弘編, 1984, 『恐慌下の東北農村 下巻』不二出版。
- 松本武彦, 2015, 「富士山と日本陸軍の少年兵養成——陸軍少年戦車兵学校小考」『山梨学院大学法学論集』76: 262-220。
- 宮本常一, 1995, 『忘れられた日本人』岩波書店。
- 向井啓二, 2003, 「海軍特別年少兵ノート」『種智院大

- 学研究紀要』4: 70-86。
- 成田龍一, 2010, 『「戦争経験」の戦後史——語られた体験／証言／記憶』岩波書店。
- ノーベル書房編集部, 1980, 『わが海軍——旧海軍全教育機関の記録／写真集』ノーベル書房。
- 大江志乃夫, 1982, 「警察予備隊・保安隊」『法学セミナー』26(12): 66-9。
- 大門正克, 1994, 『近代日本と農村社会——農民世界の変容と国家』日本経済評論社。
- , 2000, 『民衆の教育経験』青木書店。
- 陸前高田市史編集委員会, 1996, 『陸前高田市史 第4巻 沿革編 (下)』。
- 桜井厚・小林多寿子編著, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房。
- 佐藤忠男, 1981, 「私の実感としての“予科練”」毎日出版企画社『予科練』（別冊一億人の昭和史）毎日新聞社, 260-5。
- 瀬間喬, 1983, 『海軍用語おもしろ辞典』光人社。
- 瀬戸利春, 2005, 「海防艦丙型 丁型」『歴史群像』14(6): 8-11。
- 杉原保史, 1996, 「日常生活におけるサバイバーズ・ギルト——負い目による自己他者境界の不明瞭化」『大谷学報』76(1): 17-30。
- 鈴木英夫, 1943, 『陸海軍少年兵志願者読本』希望の窓社。
- 鈴木貴, 2002, 「陸海軍少年（志願）兵徴募体制の確立過程——静岡県磐田郡の事例を中心として」『日本の教育史学』45: 123-41。
- 高野邦夫, 2010, 『軍隊教育と国民教育——帝国陸海軍軍学校の研究』つなん出版。
- 渡辺清, 1960, 「少年兵における戦後史の落丁」『思想の科学』20: 53-8。
- , 1981, 『私の天皇観』辺境社。
- , 1982a, 『戦艦武蔵の最期』朝日新聞社。
- , 1982b, 『海の城』朝日新聞社。
- , 2004, 『砕かれた神』岩波書店。
- 渡辺雅哉・植村秀樹, 2007, 「警察予備隊の変貌——コンスタビュラーから防衛部隊へ」『軍事史学』43(1): 36-50。
- 吉田裕, 1995, 『日本人の戦争観』岩波書店。
- , 2002, 『日本の軍隊』岩波書店。
- , 2017, 『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』中央公論新社。

War Experience as Reminiscence :
A Study on the Life Story of a Child Soldier Who Served
in the Imperial Japanese Navy

WATANABE Yusukeⁱ

Abstract : In the closing stages of the Asia–Pacific War, the narrator of the life story discussed in this study was a militarist boy who volunteered in the Imperial Japanese Navy, having longed for a navy-blue sailor uniform. In the navy, he suffered such severe beatings and other abuse that he considered suicide; he also faced fierce battles that had resulted in a large number of deaths. Despite these difficulties, after the war, he worked in the Japan Self-Defense Forces until his retirement. This means that he voluntarily served in military organizations twice, before and after the defeat in the war. He did not critically reflect on his war experience, ask himself questions about war responsibility, or speak aloud of any anti-war convictions. His comrades were killed during battle, but he seems not to have been troubled by survivor guilt. Rather, he often spoke nostalgically about his war experience. The objective of this study was to reconstruct the life story of a former child soldier who recounted his experiences and to reveal how, through his military life, he had faced war and how he gave meaning to his experience. His recollection of war experience, in which he seems to look back to military life with nostalgia, is not inferior to accounts that bring tragic and anti-war sentiment to the fore and can help to further understand war as a social phenomenon.

Keywords : sociology of war, interview, volunteer soldier, military life

i Visiting Researcher, The Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University